# 一、暴淫暴触

宙に浮かぶ逆さ城――輝針城の広間にて、紫は地に伏していた。呼吸は荒く、額は汗を浮かべている。お気に入りのドレスは無残にもぼろぼろだ。破れたところからは白い肌が覗いている。土埃に汚れ、切り傷や擦り傷がところどころ見受けられた。

酷い疲労感だ。全身が痛み、腕一本動かしただけでも悲鳴をあげる。今すぐ帰ってベッドで休みたいが、そうも言っていられない――目の前に、敵が立っているからだ。

その敵の方はといえば、彼女と違ってぴんぴんしている。それどころか、息ひとつ乱れていない。相当な実力者である紫にそれだけの怪我を負わせたにも関わらず、だ。では彼女は紫よりも強いのかといえば、答えは全くのノー。雑魚もいいところだった。

そう、紫は格下相手に敗北を喫したのだ。それも「やや下」ではなく、比べるのも馬鹿らしく思えてくるような、「次元が違うほど下」の相手に。

弾幕ごっこでの敗北なら、まだ許せる。あれは「強者に対する弱者の対抗手段」がそもそものコンセプトだ。ならば、自分――強者か弱者かなら間違いなく強者側――の敗北はむしろ自然ですらある。だが、命のやりとりとなれば話は別だ。ありえない。

苛立ちと屈辱とから、床を殴りつける。腕力に優れるタイプではないものの、薄い板材程度ならどうということもなく叩き割れる、はずだった。現実は真逆だ。床板はびくともせず、むしろ叩いた手の方が痛いぐらいだった。それはなにも、彼女が満身

創痍の状態であり力が込められないからだけではない。それ以上に重大な理由がある。

今の紫の力は、本人のものではない。

「どうしたのさ？　ほら、立って攻撃してきなよ。さっきみたいに全部避けたうえで手痛い反撃をこれでもかって叩き込んであげるから。ほらほらどうしたのさァ」

侮蔑の感情を隠しもしない声が上から降り注ぐ。戦う余力が彼女に残っていないと理解しているのがはっきりと分かる、小馬鹿にしたような口調。その声の主こそが、先程まで戦っていた相手である。

紫としては、そもそも相手が自分と「戦う」ことができるとすら思っていなかった。どちらかといえば「蹂躙」になるだろうと。相手の力量が、自分と「戦闘」を行える水準に達していない、弱すぎて話にならない、と。相手を軽んじているわけではなく、しごく客観的な判断に基づいての結論だ。おそらく誰もがこの意見に同意するだろう。

それでも彼女は油断せず、初めから全力で、文字通り殺しに行った。十重二十重に攻撃を置き、相手がどこへ逃げようともミンチ肉になるようにした――それら全てが、見事に回避された。その時点で想定外だったが、紫とて百戦錬磨である。すぐに己を取り戻し、第二波を用意せんとした。

ところが。彼女にとって、もう一つ想定外のことが起こった。相手の反撃だ。予測

より遥かに早く、凄まじい威力の一撃が飛んできた。回避するどころか身じろぎする暇すらなく、直撃を受けた。その結果が、今のボロ雑巾のような有り様だ。
重ね重ねになるが、紫と相手との実力差は、間違いなく天と地ほど――いや、それ以上にあった。正面からやりあえば、五秒と経たずに紫の勝利で終わっていただろう。そして、彼女の敗因も、その実力差にあった。
能力名、「何でもひっくり返す程度の能力」。所有者――敵の名を、鬼人正邪という。正邪は天邪鬼だ。そして天邪鬼というのは、多種多様な妖怪の中でも相当弱い部類に属する。この「相当弱い」という事実が、彼女の能力と非常にマッチしていた。
ひっくり返されたのは、二人の実力だった。正邪が紫の一騎当千の力を得た一方で、紫には箸にも棒にもかからないようなものが押し付けられた。戦闘でなく蹂躙になるだろうという予測が、彼女にそのまま返って来た。こうなってしまっては、どれだけ知略を巡らせようと無駄だ。工夫に工夫を重ねたところで、湖の水をてのひらで全て汲み出すなど不可能だし、スコップ一本で山を掘り崩すこともできないのだから。
要は、能力を食らった時点で詰みだったのだ。だがそれでも、負けを認めることは、矜持が許さなかった。幻想郷の管理者が、こんな有象無象に敗北など。
「……黙りなさい、馬の骨風情が」

歯を噛み締め、その隙間から殺意のこもった言葉を投げつけ、睨みつける。凡夫が竦み上がるような視線に晒されてなお、正邪は怯むでもなく怒るでもなく、へらへらと笑っていた。その人となりを知らずとも、底意地の悪さをうかがえる表情だった。

「馬の骨ねェ。それに負けたあんたは何なんだろうね。カエルのションベンとか？」

そこに浮かんでいるのは「余裕」だった。どれだけ馬鹿にしても、どれだけ煽ろうとも、自分の身が脅かされることはないという、絶対の余裕だ。それだけのカードを、今の正邪は握っているのだ。紫など、吹けば飛ぶ埃くらいにしか見えているまい。

紫は舌打ちした。どんな都合の良いステータスでシミュレートしても、勝ちが全く見えてこない。何故なら自分は、天邪鬼ごときにかすり傷一つ付けられるような存在ではないのだから。理不尽なほど高い壁は、今や彼女に対して牙をむいていた。

そもそも何故このようなことになったかといえば、事の発端は正邪のほうにある。厳密にいえば、正邪たちのしでかしたことに。

幻想郷の妖怪は好き勝手に振舞っているようにみえる。しかし実際は、ある暗黙の了解に従っている。無双の力をもつ輩どもが揃ってやりたい放題すれば、いかな博麗大結界でもあっという間にキャパシティの限界を迎え、壊れてしまうからだ。そしてその暗黙の了解というのが、異変というシステムである。

妖怪は人間を襲って食らう。人間は妖怪に対抗・退治する――この摂理を擬似化し、命名決闘法の下に再現したものが異変だ。紅霧、春雪、永夜などなど、異変は人間に影響を与えたものの、どれ一つとして人間が全滅するほどの被害はもたらさなかった。妖怪は人間に恐れられるが故に存在できる。逆にいえば、人間を根絶やしにすると、巡り巡って妖怪側の衰退・滅亡をも招くということだ。要はそこが「越えられぬ一線」であり、「幻想郷は全てを受け入れる」という売り文句に付けられた但し書きだ。

それを無視した良い――あるいは悪い例が、天人の起こした地震だ。博麗神社は、「人間は妖怪を退治する」を実現する機関といえる。それを破壊するという行為は、異変のシステム自体への攻撃であるし、ひいては幻想郷の存続を危うくするだろう。あの馬鹿者は自分の愚行の意味などおそらく未だに認識も理解もしていないだろうが、なんにせよルールを破ったことに違いはなく、ならばルールに基づいて裁かれる――人間に退治される――必要もない。結局、紫本人が出動し、叩き潰した。

今回のこれ、鬼人正邪と少名針妙丸の両名が「下克上」をうたって起こした異変も、枠組みそのものへの攻撃だ。人妖の立場を入れ替えるというのだから。もっといえば、自分のしていることの意味を理解している分、あのアホの天人よりも悪質だった。

自分が出るだけの理由はあった。だがなにせ相手は天邪鬼と小人、天人よりずっと

格は落ちる。やらかした内容は問題だが、別に人間に任せておいても問題あるまいと判断し、紫は様子見していた。しかし、巫女も魔女もボロボロになって帰ってくる。今思えば、自分がされたのと同じように、実力の入れ替えによって負けたのだろう。とはいえ、そのときはそんなことなど知りもしない。結局、面倒だなどと思いつつも自らこの逆さ城に乗り込まざるを得なかったのだ。

敗北の原因に自分の判断ミスが含まれているというのが、なお腹立たしかった。

「散々暴れてくれたんだ、覚悟はできてるよねぇ。光栄に思いなよ、あんたの首を、私の下克上の記念すべき第一歩にしてやるって言ってるんだからさァ」

正邪は「私の」を強調した。想像はついていたが、もう一人の主犯たる小人は利用されているだけなのだろう。なおのこと、こいつの始末は必須だ。紫は舌打ちした。腸が煮えくり返りそうな話だが、立ち上がる余力もない状態では戦えるはずもない。一旦逃げて――いや、撤退し態勢を整えるべきだ。幸いなことに、実力を奪われこそしたものの、能力は未だ健在だ。隙間を使えば、擬似的な瞬間移動ができる。逃げる――撤退するにはうってつけだ。

「逃すわけないじゃん。アホなの？」

「いッ……！」

だが、正邪とてそれを見落とすほど間抜けではない。隙間を開くには、その方向に手を一振りする必要がある。紫の白い手を彼女は容赦なく踏みつけ、動作を阻害した。
「なんつーか、妖怪の賢者なんて名乗ってる割に、行動がお粗末だよねぇ。私ですら思いつくような行動とってどうすんの？　もしかしてナメてる？」
正邪はそのまま、靴底でもって紫の手の甲をぐりぐりと踏みにじる。骨の軋む音に、彼女は歯を噛み締めて呻いた。
「まぁ安心していいよ。私だって鬼畜外道じゃないんだ。すぐ殺すのだけは勘弁してあげようじゃん」
感謝しろよ、と言わんばかりの声色だったが、信用など到底できない。
「……何を考えてるの？」
「ふーん。単なる善意じゃないってことは理解できるんだ。いやさ、あんたみたいな大物、すぐに首チョンパするにはもったいない。嬲るだけ嬲ったほうが楽しいから。ま、自業自得、因果応報ってやつだと思って諦めるこったね」
浮かんだのは、絵に描いたような下衆の笑みだった。胸糞悪さを通り越し、吐き気すら覚えそうだ。反吐が出るというのは、こういう時に使うべき言葉なのだろう。
「ふん、好きになさい」

この間抜けめ――よほど付け足してやろうかと思いつつも、やめた。
実際、正邪のアイデアは、間抜け以外の何物でもなかった。奴のいう「下克上の道」とは、自身が幻想郷の頂点に立つことだろう。障害は多い。敵対陣営――この場合は幻想郷の全陣営が対策を講じる前に素早く行動し、邪魔者を全て排除せねばならない。
「嬲るだけ嬲る」ような道草を食っている暇など、ありはしないのだ。
とはいえ、こちらとしては助かる話だ。奴が何を企てているか知らないが、時間を稼ぐほど、脱出や反撃のチャンスは高まる。虎視眈々と、その瞬間を狙うだけだ。
「言われなくても好きにするよ。――そぉらお前ら、聞いたろう、出番だ」
「……ッ?」
悪役然として、正邪は指を鳴らした。途端、しゅるりしゅるりと、周囲を蛇じみた影が取り囲み始める。あるいは、元から待機していたのが活発になったのだろうか。いずれにせよ、嫌な予感がする。天邪鬼の考えである以上ろくなものではあるまいと踏んでいたが、想像以上に悪趣味なものを持ってくる気かもしれない。
「けけけ、あんたみたいに喧嘩売ってくるやつのために、特別に用意してやったんだ。せいぜい『楽しむ』こったね」
蔑むような笑みを崩すことなく、正邪は二・三歩ほど離れた。それを合図とするか

のように、無数の影はしゅるしゅると這いながら紫へ接近していく。
蛇のように見えるそれらは、しかし蛇ではなかった。形だけならイソギンチャクの触手やクラゲの腕などを大きくしたかのように見えるが、本体は見当たらない。
その生物たちはうねうねと好き勝手に蠢いているように見えるが、統制された動きで四方八方を囲み、逃げ場を奪っていく。その姿は、紫を嫌悪させるのには十分だ。最たる原因は色だろう。黒の交じった紫や濁った緑を基調とし、ドブ川をかき混ぜたような灰や茶の斑が浮かんでいる。眺めているだけで胸がむかついてくる。
「くく、どうよ私のペットは？　特別にあんたにも遊ばせてやるよ」
「ペット？　これが？　ふん、持ち主の品性がよく現れてること」
皮肉を飛ばすが、内心で焦りを覚えていた。この生物が何なのか知らないが、正邪が呼び出したという点を覗いても、ろくなものではあるまい。触れられるのもごめんだが、撃退できるほど体力は回復していない。
「この、触るんじゃない」
触手の一本が、手首に巻き付く。生暖かく、表面は粘着く汁でぬめっている。それがまた、嫌悪を煽った。腕を引くが、やけに力強く、びくともしない。自由な片手で引き剥がそうとするも、柔軟な一方で頑丈でもあり、爪でひっかく程度ではかすり傷

すらつかなかった。
　更にもう一本触手が伸び、自由な方の手首までも絡めとる。そのまま、吊り上げるような形で強制的に立ち上がらされ、爪先立ちを強いらされる。身体の重みによって、肩が悲鳴をあげた。破れた服から肌がのぞくが、隠すための腕の自由は奪われている。
　いつの間にか正邪は立ち去っており、広間の殆どは触手に覆い尽くされていた。毒々しい色に埋め尽くされ、夏場に放置した魚のような生臭さが場を支配している。悪夢めいた光景だった。ぬちゃり、にちゃりという粘っこく耳につく音が響き渡る。それ以外は、なんとか拘束から逃れようとする紫の小さな息遣いが聞こえるばかりだった。
　触手が更にもう一本、紫の目の前に現れる。腕に絡まるそれとは異なり、ずいぶん細い。個体差なのか、はたまたそれぞれに固有の役割でもあるのか。後者だとして、その「役割」というのもきっとろくなものではあるまい。この嫌な予感が根拠だ。
「いい加減、放しなさッ――あァッ!?」
　ずるりと。その触手は、襟から服の内側へ潜り込んだ。生暖かな粘液が地肌を汚す。じたばたと体を揺さぶるが、相手もその程度では諦めない。
「この、何を考えてるの、やめなさいッ！」
　得体のしれないものに身体をいじくられる嫌悪から、ひたすら喚き散らした。両手

を動かせたなら、力を奪われていなければ、塵一つ残さず消し飛ばしてやろうものを。下等な生物にいいようにされる屈辱に、歯を噛みしめる。怒りが湧き上がってくる。正邪に対して、そして醜態を晒す己に対して。

だが、そんな怒りも、いっとき忘れさられる瞬間が訪れる。

「ッ、きゃああ！」

いかにも女性らしいというべき、甲高い悲鳴。紫がそのような声を上げたと、普段の彼女を知るものが聞いたら、腹を抱えて笑い転げるか、そいつは偽物じゃないかと疑うことだろう。そのような似合わない行動に出てしまうほどの驚きを、触手は彼女に与えたのだ。

紫のドレスは、ブラジャーや下着ごとあっさりと引き裂かれてしまった。他ならぬ触手によって。その際の風圧により前がはだけ、肌が白日の下に晒される。

ドレスがゆったりしたデザインであったため目立っていなかったが、彼女の身体はそれは美しいものだった。緻密な計算のもと設計されたシャープな線が肌を構成している。多くの場合、そのような身体は中性的な肉付きになる。しかし彼女に限っては違っていた。最高級のものをさらに選別した世界最高峰のシルクのようになめらかな肌は、まさに奇跡としかいいようのない数学的・幾何学的厳密さの下、女性の「美」

そのものを体現しているかのようだった。

か細い喉としゅるりとした胸鎖乳突筋が象る華奢な三角形を下れば、わずかに浮き出た鎖骨と、それが形作る慎ましやかな窪みに行き会う。その線をたどると、やがて方のなだらかな稜線と合流し、腕へと繋がる。逆に下へと向かえば、女性を象徴するような豊かな膨らみへと続いていく――否、それは「膨らみ」などという無味乾燥な言葉では到底表せない。豊満な乳房は大の男の手にも余るほどで、その部位が理想とするぷるんとした弾力とむにゅりとした柔らかさの両方をしっかり兼ね備えている。先端は赤子の唇のような薄桜色をしており、外気に触れたせいか、わずかに充血しているようにも見えた。並大抵の男ならばその双山を見ただけで陰茎を膨らませ、もし彼女が身動ぎして山が震えでもしたならば、興奮のあまりたちどころに射精することだろう。だが、彼女の肉体の素晴らしさは、それだけにとどまらない。二つの果実はこの宇宙で最も蠱惑的にすら思える釣針状の曲線を描きつつ終端を迎え、次にやって来るのは腹と腰だ。白く輝き染み一つない腹部は、さながら朝一番の雪原のようだ。ややくびれた腰は、無数の幾何学理論に裏付けされたような正確にして美しい稜線を描き、太腿へと繋がっていく。臀部は無駄なく脂肪を纏いながらもしっかりと締まり、触れれば確かな弾力で押し返してきそうだ。そして、両足の間、女性の象徴たる魅惑

の園は、ふんわりした黄金色の和毛によって守られてひっそりとその身を隠しつつも、世の男ども、雄どもに対して暴力的なまでの存在感を放っている。ペニスのある生物が今の彼女を見たなら、それはきっと彼の目に焼きつき、寝るために瞳を閉じる度に浮かんでは悶々とさせることだろう。

完璧な美、瑕疵無きうつくしさ、生ける芸術。そこにあったのは、そういうふうに呼ばれるべきものだった。優れた彫刻は見る者に息を呑む緊張感を与えるが、彼女の肉体も同様だ。これを見る者は類稀なる幸運の持ち主であり、同時に不幸の神の寵愛をも受けているといえるだろう。美しさの終着点とでも呼ぶべきものを目の当たりにできるというのは、間違いなく幸運だ。だが、そんな「完全」を目にしてしまえば、他の芸術品がどれも「不完全」で「不愉快」なものに思われ、それらを楽しむ心が、彼から永遠に喪われてしまうだろう。それはある意味で、不幸なことだ。

思考が存在するかすら怪しいような生物――そもそも生物だろうか――にすらも、そこにあるのがこの世に二つとない肉体であると通じたのだろうか、彼らはしばし、見とれるかのように動きを止めた。しかしそれも長くは続かなかった。ドレスを破り去った触手は、彼女の肉体を再びまさぐり始める。

「図に乗るんじゃない、後で八つ裂きにされたくないならッ」

もしこの場に誰かいれば、それが強がりだと声色から分かったろう。抵抗の手段を奪われ、得体のしれないものにいいようにされる――本人は否定するだろうが、紫が感じているのは、紛れもない恐怖だった。無理もなかった。今の彼女は、虎の眼前に放りだされた生肉に等しいのだから。

体表から分泌されるねとつく汁を刷り込むかのように、触手は紫の柔らかな乳房に己を押し当て摩擦する。脂肪の塊は、蹂躙するものに合わすように柔軟に形を変える。

気味の悪い感触、身体を汚されることへの嫌悪、そしてなにより羞恥から、彼女は顔を背けた。そう、たとえ何千年を生きてきた――これからも生きるだろう――大妖だろうと、乙女としての恥じらいは存在する。そして、今されているこれは恥の極み、一生ものの屈辱であった。

屈辱。だがそれは、身体を好きなように弄られることだけに対するものではない。

「ッ……ふ」

鼻から抜ける微かな吐息。生理的なものでこそあったが、通常の呼吸ではない。

――こんな、人の形すらしてないようなものに。

双丘を弄られることによる官能を、彼女は少なからず覚えていた。再び歯噛みする。己の肉体が酷く浅ましいものに思えた。生理現象だから仕方ないなどという言い訳を、

高いプライドは許さなかった。力を奪われ隙間も開けず、なんと無様なことだろうか。
「くぅ……ふ、ぅ」
どうにか堪えようと試みるが、ぬるぬるとした感触が這いずり回るたび、喉は震え、曖昧な吐息を零す。そのたびに己を思い切り殴りたく思うが、両手は今、使えない。
気づけば、その肉体を弄る触手は、一本だけではなくなっていた。さらけ出された腋窩へ、体液を塗りこむように執拗に触手が這う。同様に腹部と臀部も一本ずつ触手が這い、美しい肌を濁液まみれにしていく。それでも彼女の身体は、汚されて台無しになるどころか、むしろぬらぬらと輝いてそのメリハリの効いた肉付きを強調させた。それはやはり芸術的であり、そしてなんとも淫らな様だった。
触手が蠢くたび、ぬるり、ずちゃりと、液体が肌に塗り込められていくのがわかる。気味が悪い――そう思う一方で、彼女は熱を感じてもいた。ねばつく汁が擦り込まれるほどに、全身に熱がじわじわと広がっていく。そして熱を孕めば孕むほど、身体は、己の上を這いずりまわる異物を、より明確に、敏感に感じ取っていく。
「あ、ぅッ」
吐息は、次第に声という輪郭を得ていく。汁には媚毒が含まれており、それが肌を経由して身体を冒しつつあるのだ。性感がさざ波のように断続的に訪れ、身を苛む。

奥歯を噛み締めて堪えようという試みは、もはやほとんど効果を上げていない。いや、堪えようという気持ち自体が、奪い去られていく。

「はぁ、あッ、んん」

出はじめたものを止めるのは、出ないように留めておくことよりもはるかに難しい。曖昧だった声は、どんどんと「嬌声」という明確な形へと変わっていく。こんな化物にいいようにされてたまるか――気丈な考えは、水に晒されたインクのように薄れる。抵抗心が消え、この異形どもを受け入れてしまいそうになる。

官能は身体ばかりか精神にまで影響しているようだった。あるいは触手の体液に、そのような成分までもが込められているのかもしれない。抵抗せねばという思いは、どろどろと溶かされていた。

全身をぬるぬると汚され、授乳器官を蹂躙されながら、紫はしばらく、鼻がかった甘い声を上げ続けた。積み重なった淫毒は強力な酸のように理性を溶かし、その内に塗りこまれていた欲望を、反対に増幅してみせる。

「はーっ、あ、はぁ」

暑い。あるいは熱い。汗をかいている気がするが、全身にまぶされた粘液と混ざり、判然としない。頭がぼんやりとして、まともに思考ができない。今自分がされている

ことは、されてはならないとんでもないことだった気がする。しかし、何故されてはならないのか、忘れてしまった。思い出そうとするたび、思考の流れに欲が割り込み、別にいいじゃないかと主張してくる。一時の快感に流されたところで、なにか問題があるだろうか？　気持ちいいことに変わりはないし、気持ちいいのは良いことなのは間違いない。自分に害のあるものなら、例えば腐敗した食物を不味く感じるのと同様、身体が警告するはずだ。それがないのだから、良いものに違いないじゃないか。

快楽は次から次に屁理屈をこねては、頭の中のまだ正常な部分までをも堕落させにかかる。抗えるはずもない。彼女の頭は、そのほとんどを既に麻痺させられていたのだから。多勢に無勢というものだった。

「……」

食欲、睡眠欲、そして性欲。いかな妖怪だろうと、根源的な欲には逆らうことなどできるはずもない。紫は身体の力を抜いた。さらに、閉じていた脚をわずかに開いた。さながら、飢えた獣の前に放りだされた餌を、自ら演じているかのようだ。

下着という守護者を失い、脚という砦までも失い、淫園は完全に無防備にされた。そこはとろ火にかけるような官能によって既に蜜を湛え、嬲られる瞬間を待ち望んでいるかのようにも見える。薄金色をした女の茂みは彼女自身のリキッドや汗に濡れ、

てらてらと輝っている。
　ようやく開かれた魅惑の隙間へ、間髪入れずに触手は潜り込んだ。紫からすれば、ちょうど棒をまたぐような形になった。
「はぁ……ン」
　熱い吐息がこぼれ、続いて声を飲み込む小さな音がした。女としてもっとも重要な部分に無遠慮に触れられているという興奮と、これから何をされてしまうのだろうという期待からくるものだった。
「あっ、は、あぁアッ」
　股下（ワレメ）に潜り込む触手は、先程よりもさらに濃密で多量の体液を分泌しながら、彼女の秘部（ココ）を擦るようにずりゅずりゅと前後に動き始める。汚濁はあっという間に淫蜜と混ざり、陰唇を汚していく。
　敏感な粘膜、それも性器のそれに直接淫毒（媚薬）を塗りこまれればどうなるかなど、火を見るよりも明らかなことだ。しかし、彼女はそこに危険性を認められなかった。そのような段階はとうに通り越していた。
　気づけば、自ら愛撫を望むかのように、くびれた腰をかくかくと前後させていた。凹凸のないつるつるとした肉が淫裂を嬲るたび、体の芯が痺れていくようなじぃんと

した感覚を覚え、声帯は艶やかに震える。ぬちゃ、ぬちゃと上がる水音は、触手の汁だけによるものではあるまい。

一方で、その間にも、両乳房を中心に、彼女の全身は好き放題に弄り回されている。細い触手は器用に肉毬を撫で、擦り、揉みしだき、ぴぃんと弾いては快楽を引き出す。桜色をしていた先端は硬く充血してその紅みを増し、性的興奮を端的に表していた。

「んんァ、は、あぁぁ」

声には恥の色などもはやほとんど残っていなかった。発情した雌（おんな）の声色だ。そう、気高き賢者・八雲紫はもはや消え失せ、そこにいるのは一人のおんなだったのだ。

股座の触手は、彼女の弾力ある尻の谷間に沿い、かき分けるように前後する。菊座までもが汚濁に汚されていく。その肌で触手の毒に浸されていないところは、もはやほとんど存在していない。

そんな中、彼女は胸を突き出し、腰をゆすって行為をねだりすらしていた。触手は見定めるかのようにしばし停止し、やがて結論を出したのか、さらなる段階へ進む。

「あッ……」

乳房を嬲っていた触手が離れる。ようやく開放された魅惑の果実の谷間で、粘着く汁がぬとぬとと糸を引いている。

惜しむような声は、どうしてと言外に語っていた。恨めしげな視線が彼らへ向かう。

――だが、彼らの行動は、紫から快感という餌を取り上げるためではなかった。

先ほどとはまた別の個体が現れる。先端が膨らみ、切り込みが入っている。蕾にも似たそれに、紫は期待の籠もった熱い視線を送る。

柔らかで丸い乳房の先端、硬い尖りの目の前で、触手はその先端をぱかりと三つに開く。開花したそれは、出来損ないのヒトデのようにも見える。紫はそれが次にどのような行動に出るか理解した。理解した矢先に、それはぴったりと胸へ張り付いた。

「あはアッ！」

白い肌に、暗緑色の毒々しい管が取り付けられたようにも見える。紫は首を反らし、電気のように走った快感に打ち震えた。予測・理解ができたからといって、無反応でいられるというわけではないのだ。

ヒトデ型触手は乳でも吸い出そうとしているかのように、内圧をかけ柔らかな肉塊を搾り上げてくる。先ほどまでのとろ火で煮るような官能とは全く違う、はっきりとした形のある快楽だ。焦らしに焦らされていた彼女にとって、それは砂漠を旅する者にとってのオアシスにも等しかった。それゆえに、嬌声はさきほどまでと比べて一際大きく、高いものとなった。

「あっ、これいい、この子すごいっ」
今の彼女の頭に、正邪のことや異変のことが欠片でも残っているだろうか？　否。そんなことなどもはや些事に過ぎなかった。理性も思考も媚毒に崩壊させられていた。その最後のひと押しとなったのが、さきほどのソリッドな快感だったのだ。それに、仮に正邪のことを考えるだけの余裕が残されていたとして、今の彼女が抱くのは感謝だろう。このような素晴らしいペットをあてがってくれてありがとう、という感謝だ。なんとも倒錯した考えだが、彼女は本気だ。
先ほどまでの反抗的な態度は一転し、紫は彼らをひどく気に入っていた。彼らとの楽しみは、普通に過ごす限り味わえない快楽を与えてくれる。
ヒトデはぢゅうぢゅうと音を立てながら、たわわな双丘の形が釣鐘状になるほどに強く吸い付く。乳房が付け根から搾り上げられるように感じ、紫はひぃ、ひぃと声を上げ、膝を震わせながらその感覚に溺れる。
紫は、現状でも十分に満足していた。だが触手はそうではない。まだ彼女の身体で堪能できる場所はいくらでも残っている。そもそも、今責めている肉果実も、味わい尽くしたとは言いがたい。
「アァッ！　ひ、んっ、あはぁ！」

背筋が跳ね、手のひらからこぼれんほどの双肉がぶるんと揺れる。ヒトデの内側、彼女の肌と密着している部分に、無数の小さな凹凸が備わっている。それらが一斉に動き出したのだ。それは例えるなら、無数の舌に同時に舐められるのにも等しい。毒液の効果がなかったとしても、今のような嬌声をあげずにはいられなかったろう。

特に先端、びぃぃんと勃起した乳首に対する責めなどは、執拗を通り越して偏執的（マニアック）ですらある。比較的大きな凹凸が、ブラシか何かのようにぬるぬると、代わる代わるその充血した尖りをこすっては、鋭い感覚を与え続ける。決してワンパターンでなく、それどころか刻一刻と責め方を変えてくる。紫には順応することすら許されなかった。その間も淫裂は縄のような触手によってにゅるにゅると責め立てられ、勃起した淫核をいじめ続けられている。とめどなく汁の溢れる秘部は、さながら泉のようだった。おそらくはこの世で最も淫らな泉だろう。

「はぁッ、あ、ひぃ」

股を這う触手が離れていく。今度は恨めしげな視線など向けなかったし、残念にも思わなかった。それが「選手交代」であることを、既に知っているからだ。故にその口から零れたのは、「早くぅ」という誘いの言葉だった。その瞬間の紫は、まるで娼婦だった――違う。娼婦は「金のために」身体を「売る」者だ。売らねば食えぬからと

いう大義名分が一応ある。生きていくためだという言い訳が。であれば、紫を娼婦と呼ばうことはできまい。今の紫は、ただ快楽のため得体の知れない生物に身を開こうとしている。それは娼婦よりもずっと純粋で、そして堕落した有り様だった。

新たにやって来たのは、彼女の白い指よりさらに細長い、肉色をした触手が三本。うねうねと蠢くそれらも、やはり例の汚汁を滴らせる、女鳴かせの生物だった。

「はぁ――」

零れたのは、歓喜のため息だ。

――三本も。

それが彼女の脳裏をよぎった思考だった。一本でも蕩けそうな性感を与えてくれたものが、三本も。

「ねぇ、ねえ。お願い、早くちょうだぁい」

腰をくねくねと揺らめかせながら、快楽をねだる。その声に知性や誇りは残されていなかった。だらけきった雌のそれだ。そして彼らは、自らの虜(どれい)となった者を徹底的に調教するために動き始める。

「んんぅぅ！」

嬌声はくぐもった呻きとなった。三本の触手は、紫の身体のそれぞれへ取り付いた。

一本は、ぐずぐずに蕩け、さらなる被虐を求めて蠢く膣口へ。もう一本は、排泄器官、すなわち「出す」ための場所でありながら、何かが「入って」くるのを期待しているかのようにひくひく、ぴくぴくとすぼまっては緩まる、薄灰色の背徳の門へ。そして最後の一本は、おねだりの言葉を並べ立てる、ぷるりと鮮やかな桃色の唇に囲まれた空間——口腔へ。

触手たちはそれぞれ、自分の役割を完璧に理解しているかのような連携を見せつつ、その頼りなげな外見からは想像もつかぬほど明確な刺激と性感を紫に叩きつけていく。

「んぃ、ンッ、ふぅ、ンンンぅ！」

あるいはその性感は、彼女が既に駄目にされてしまっているがゆえのことだったのかもしれない。触手の動きは、さほど激しくはなかった。擬態語で表すとして、精々「くにくに」程度だろう。しかし、もはや彼女にとってそんなことは大したことではない。気持ちいい。それが全てだ。そんな堕落した思考が、悪魔のように彼女を支配していたのだ。

「ぢゅる、ふむっ、んふぅ」

彼女は頭を前後させ、口腔に潜り込んだ触手に積極的に奉仕する。ねばつく汁が、口いっぱいに満ちる。んぐ、んぐと喉を鳴らしてそれを嚥下する。肌を経由してすら

絶大な効果を発揮した催淫の汁を、自ら体内に取り込んでいく。
彼女の唇が、粘着く汁で汚されていく。口端からは涎とも汚汁ともとれぬ液が零れ、つぅぅ、と顎へ向かって筋を作っていく。
「んんッ！　ぐぷ、ふぅッ、んうっぐ」
一本は膣口に浅く出入りし、ぢゅぷ、ちゅむと可愛らしい水音をしきりに立てる。もう一本は菊座の皺をなぞるようにうにうにと動きながら、時折その先端でつんつんとつつく。最後の一本は口腔の内を自在に踊り回り、舌や歯茎、口壁、扁桃、喉壁にいたるまでまんべんなくマーキングしている。どれもこれも極めて正確に、紫の弱点を責め立ててくる。
誰にでも感じやすいところと感じにくいところがある。紫が今ねっとりとした愛撫を受けているのは、まさにその前者（性感帯）だった。一連の行為の中で、触手は既に、彼女の肉体の細微に至るまで見抜いていた。ひょっとすると、本人以上に。
腰が抜けるような甘い官能と、背筋に抜けるぞくぞくとした快感、飲み込むほどに脳を蕩かしていく甘露。下半身が性感の坩堝と化している一方で、心臓をどろどろと煮詰めようとするかのような退廃的な悦びが、双丘を埋め尽くしている。
合計四カ所。ただでさえ敏感になっているところに、四カ所から同時に責められる

のだ。高まっていた彼女のメーターが振り切れるのに、そう時間はかからない。
「んんぅ、んグッ、ぐむ、――ッ、んん、ふ！」
目尻に法悦の涙すら浮かべながら、彼女は己が快楽の頂点に達しようとしていると悟る。快楽に溺れる様は、さながら狂女だ。ある意味でそれは正しい。今の彼女は、脳髄までどっぷり淫毒に侵され、快感に狂わされているのだから。
触手たちは、彼女の反応の意味するところを理解しているかのように――あるいは、震える膝や跳ねる身体といった身体的兆候から見抜いたのか――とどめを刺すように、にわかにその動きを激しくする。それは、崖っぷちに立つ者を突き落とすには、十分すぎるほどだった。
「ッ――――ンぃゥウンンンンンンンッ!!」
けたたましいほどのくぐもった嬌声と共に、淫裂（ヴァギナ）からぶしぃッ、と愛汁が間欠泉のように噴き出した。それが絶頂の合図だった。背筋は海老のように反り、全身は電気ショックでも受けたかのように痙攣する。それに合わせ、たわわな果実がスプーンでつつかれたプリンのように揺れる。太ももからつま先までは棒のようにぴぃンと伸び、筋肉の緊張、そして彼女の覚えた快楽の激しさを端的に表していた。傍から見れば、まるで一張の弓のように見えるだろう。

その瞬間の彼女の世界は、実にシンプルなものだった。白く光る視界の中で、ただ暴力的なまでの「気持ちよさ」が足の小指から頭頂までを駆け巡り、次から次へ弾け、連鎖爆発を引き起こす。性感とそれに伴う肉体感覚だけが存在する、一種の楽園――あるいは地獄だった。

彼女が肉欲の海に溺れている間も、触手たちは局部への刺激をやめることはない。それどころか、まるで海底から水夫を引きずり込む舟幽霊のように、紫をより深くへ叩き落とそうと――あるいは昇天させようと――しているかのようだった。

「んいッ、ふ、んぐ、ッ、んんんッ――」

最後に二、三度ほどびくん、びくんと大きな痙攣を繰り返した後、彼女はようやく快楽の果てからこちら側へと戻ってきた。激しい絶頂の反動で、全身は脱力している。滑らかな肌に滲んだ汗が、触手の体液と混ざってどろどろと皮膚を流れる。

彼らはようやく紫の拘束を解くと、その身体から離れた。力の抜けた膝では身体を支えきれず、床にくずおれた。荒い呼吸のたび胸郭が上下し、柔らかな双丘が震える。

心地よい気分だった――が、余韻に浸っていられるのも、僅かな間だけだった。

触手たちが沈静化したのは、ほんの十数秒ほどの間だった。彼らは再びざわめき、その獲物へと向かう。今度は指三、四本ほどの太さの触手が、股座へ近づいていく。

「ち、ちょっと待って……！」

さすがに休憩したい。重い身体を引きずり、彼らから距離を取らんとする。ただでさえ消耗しているのに、あの肉欲のうねりにもう一度飛び込むなど、狂気の沙汰だ。

だが、彼らがそのような甘えた態度を許すはずもなかった。頑丈な触手が数本ほど現れると、再び両手を拘束し、仰向けさせ、さらには両足を広げさせる。一匹の生物の手足よりも連携のとれた動きだった。

「ひっ……」

彼女は恐怖した。得体のしれない生物に好きにされてしまうことに――ではない。それはとっくに受け入れ、もはや嫌悪感も残ってはいない。そうではなく、脳神経を焼ききるほどの快感をこれでもかというほど叩き込まれることを、彼女は恐れたのだ。そんなものを受けて、正気を保てる自信など、ない。

彼女の恐れを知ってか知らずか、彼らはその感情を煽るかのようにゆっくりと動く。管状のそれはまず、己の内側を紫に見せつけるかのように、眼前に先端をもっていく。

その内部では、ブラシのような無数の襞がうごうごと蠢動していた。生理的嫌悪感を催させるその冒涜的光景に、紫は息を呑む。怖気を感じたのが半分。もう半分は、期待であった。この状況下にあっても、心の奥底では、あさましく肉欲を求めていた。

嫌、と呟きながらも、やめて、と否定しながらも、媚毒にやられた哀れな脳みそは、麻薬中毒患者のように快楽を求めてやまない。

「あ、あぁぁ」

結局、口から零れたのは、白痴のように判然としない曖昧な声のみだった。瞳は、官能を求め潤んでいた。何が本心かなど、考えるまでもない。

ゆえに、せめてもの抵抗は、あってないようなものだった。いやいやをする子供のように数度身をよじったきり、大人しくなり、次の行為を待ち始めた。

両脚の間、秘めやかな裂け目で自己主張する肉粒へ、管状触手は狙いを定める。

「あぁん……」

内側に見えたあの無数の襞が、快楽神経の集中する肉の真珠を徹底的にこね回す。想像するだけで達しそうになる甘美な妄想に、紫の表情は蕩けた。

腰を揺らす彼女へ見せつけるかのように、それはじわじわと、泥濘の中の宝石へと近づいていく。焦らされることにさえもぞくぞくとした恍惚を覚え、熱く甘い吐息を漏らす。やがて、それは陰核に覆いかぶさるかのように、彼女の股間にぴったり吸い付いた。

「……あら?」

数秒あって、間の抜けた声があがった。不思議なほど、何も感じない。襞によって地獄のような極楽を味わわされるとばかり思っていたのだが、その瞬間は訪れない。

拍子抜けだ。紫は落胆する。自分が勝手に期待を寄せただけではあるのだが、残念なことに変わりはない。――しかし。その落胆こそ、彼女の早とちりだった。

「えっ――」

呆気にとられた声。ぶつん、と。それは、何かするよりも先に、中途からちぎれてしまった。肉々しい色の管が、股からだらりとぶら下がる。二十センチほどだろうか。

彼女は混乱した。力いっぱい引っ張ってもびくともしなかった彼らが、あっさりと千切れた。蜥蜴が自ら尾を切り離すような自発的行為だろうが、目的はなんだろうか？

結論から言えば、それはすぐに明らかとなった。

「……あ、ぐぅあアッ!?」

変調はすぐに訪れた。激しい痛みが股間を襲う。陰核周辺、管が張り付いた場所に。

無数の細い針を突き立てられているような感じだ。張り付く触手が、それこそ針のような細く硬いものを体内へ突き刺しているのだ。同時に、管はめりめりと嫌な音を立てながら、形を変えていく。先端は丸く、途中でややくびれて、さらにしゅるりと彼女の胴体へと続くようなシルエットを描き始める。

「な、何よ、何なのぉッ」

予想だにしなかったことに、紫は半狂乱になりながら、ただの少女のようにべそをかく。それでも、管は無情にも変質を止めない。体内に入り込む一方で、おおよその形が整ったのか、毒々しいその体色を、紫の肌のそれと同化させはじめた。

ずぶずぶと体内に入りこまれているうちに、ふと彼女は、「侵入者」と「自分」とが「繋がった」ように感じた。物理的接触という意味ではない。それは既に成っている。そうではなく、例えば手足のように、自分の一部となったように感じたのだ。彼女は驚愕した――「それ」に、己の触覚が備わっている！

体内に入り込んでいた「何か」が、何だったのかは分からない。だがそれは、彼女の神経と接続し、そして融合し、同化してみせたのだ。管は、今やくびれから先の赤黒い色を除いて、全てが紫の肌と同じ色になっている。新しく彼女の肉体となった、「元」触手。その新たな外観は、あるものを強く思い起こさせる。というより、形も、色も、硬さも、そして付いている場所も、「それ」そのものだった。

――ペニス。

ひどく立派な、勃起した男性器。先端は鉄兜のようにびきりと張り、大砲のようなカリが下腹まで続いている。まさに凶器とでも呼ぶべき代物。

馬鹿な、ありえない。そう思うが、見れば見るほど、それは男の一物に瓜二つだ。紫は絶句した。性別を変えられ、男にされてしまったのだろうか？　だが、両乳房も、未だ濡れそぼつ淫穴も、あるべき場所にそのまま存在している。股座で自己主張するそれだけが、性別という概念をひどく裏切っていた。

愕然としたまま、彼女はそれをまじまじと見つめる。血管もきちんと通っており、ぐねぐねと表面を這っている。エラは深く張り、亀頭は赤黒く充血している。こんなグロテスクなものが、自分の体の一部になってしまった。

「あぁッ――」

小さく零れた声は、自らの変質に対する悲しみの嘆きだったろうか？　否。それは官能を待ちかねる、雌の鳴き声だった。

弄りたい！　頭に浮かんだのは、ただその一言だ。

彼女には常々、理解できないことがあった。なぜ男という生き物は、あんな細長い棒一本を、ああも躍起になって扱こうとするのかと。今なら理解できる。腹の底からこみ上げ、脳へ強烈に要求を叩きつける、新たな欲望を知った今なら。

ああ、射精したい！

この新たな欲を言語化するなら、そうなるだろう。気が狂いそうだ。世の男、雄と

いう生き物は偉大だった。こんなものと付き合いながら社会的に生きていけるなど、正気の沙汰とは思えなかった。自分など、既に頭のなかを射精の二文字でいっぱいにされているというのに。

一分。管状触手が取り付くまでに十秒、変質に三十秒、混乱に二十秒。それだけの間に、彼女はこの厄介かつ魅力的なものの虜にされてしまった。

「はぁ、んぅう」

股間から立ち上がる切なさを堪えかねる。なにせ、短くない生の中でさえ初めての経験だ。抵抗する術など知っているはずもない。そして悲劇的なことに、その情動を鎮める術もまた、彼女は持ち合わせていなかった。両手はしっかりと拘束され、自ら扱くことすらできない。一種の生き地獄だ。気が狂いそうだった。

幸いにして、あるいは不幸にして、救いは差し伸べられる。他ならぬ触手によって。

管状触手が再び近づいてきた。それだけで、彼女の聡明さは、これからされることを理解した。自らの身体を切り離して寄生し、それを責める——この触手が仕掛けるのは、そんなマッチポンプなのだ。

果たして、彼女の考え通りだった。触手はその口——にあたる部分——をがぱりと開き、紫の新たな肉体の先端を、ぱくりと咥えた。

「いひィィィっ！」
絶叫が響き渡る。ぬろぬろと粘液にまみれた肉襞が、敏感な部位を余すところなく包み込んでいる。その初めての感覚は、彼女にとってはとてつもないものだった。
首をがくがくと仰け反らせ、鋭く熱い快感を味わう。頭のどこか大事な部分を破壊されるかのような気持ちよさだった。
「アッ、ねぇ、もっと、ねぇッ」
ややあって落ち着くと、紫は眼の色を変え、行為の続きを自らねだる。麻薬以上の中毒性をもつとまでいわれる男の悦びに、たった一回の、それもほんの僅かな刺激ですっかりハマってしまっていたのだ。
おねだりの声に応えるかのように、触手は少しずつ、少しずつ、それをより深くへと咥えこんでいく。無数の襞がモノを撫でる感覚に、紫は目を白黒させ、ひぃ、ひぃと喘がされるばかりだった。
「あァっ、は、おちんちんっ、おちんちん気持ちいいっ」
それは自らの官能を煽るために吐き出された言葉であり、そして偽りなき本心でもあった。ペニスから伝わる快楽は紫を狂わせ、品も何もない淫らな言葉を紡がせる。
しばしそのように翻弄されていた彼女だったが、それでもやがて少しずつ順応し、

モノが中ほどまで咥えられる頃には、どうにか多少の余裕をもつこともできるようになっていた。

――が、あれだけ彼女を責めてきた彼らが、そんなことを許すはずもない。

「――あ、ッひいいいっ!?」

唐突に、ずろぉ、と、管は彼女のモノを根本まで一息で迎え入れた。不意の一撃に、反応が遅れた。そしてその一瞬のあと、今までにない快楽が津波のように彼女を襲う。

散々嬲られ、ある意味で快感に「慣れて」いた彼女にとってすらも、それは完全にオーバーキャパシティだった。発狂したような声を上げ、雷の直撃でも受けたように全身を震わせる。白目すらむいていた。

だが、それでも。相手を快楽による狂死の縁にまで叩き込みながらも、触手はその責めを緩めない。むしろ強めていく。ぢゅご、ちゅごと音を立てながら、管状触手は激しくピストンを始める。その内部では、ぬめつく無数の襞が肉幹を盛んに擦り上げ、撫で回し、亀頭を嬲っては尿道口をくすぐって、精液を絞りとってやろうとしている。その微妙な動作の一つ一つが、天にも昇るほどの官能を押し付けてくるのだ。音こそ可愛らしくとも、与えられるものは大層えげつなかった。たとえ海千山千の男でも、これほどの快感を受け正気を保つなど、到底不可能だろう。

「あっ、あっ、来る、来てる、あぁぁぁぁぁぁぁぁ」
そして、紫は感じていた。己の奥底からこみ上げる、焦燥にも似た衝動を。経験はなくとも、本能がその正体を知っていた。――射精が近い。
ブリッジするように腰を浮かせる。そうでもして堪えなければ、白濁はあっという間に尿道から放たれることだろう。もちろんそれは待ち望んでいることであったが、同時に、男の悦びというものにもっと浸っていたいという思いもあったのだ。
だが。触手は、そのような悠長な行為を許しはしない。
「ッァ――んひぃいいいいいいいいッ！！」
ぎゅうっと、それはモノに吸い付いた。どのような方法か、中の空気を抜き、強い圧をかけたのだ。まさに「搾り取る」ような搾精行為。限界直前だった紫が、それに堪えられるはずもなかった。欲望という風船は、既に破裂寸前だった。そんな状態のものを針で突けばどうなるか、考えるまでもないことだ。
ぼびゅるぼびゅるびゅぐりでゅるり。放たれるそれはさながら砲弾の如き勢いだ。欲望が熱いたぎりとなって尿道口から放たれるたびに、燃え盛る鉄板の上で焼かれるかのような快感を彼女は覚える。
「アァッ、ひぃ、でてる、精液、精液ッ！　私、わたしッ、精液だしてるぅッ、射精

しちゃってるぅぅぅぅぅっ」

びゅぐん、びゅぐんという脈動のたびに、彼女は狂ったように喚きたて、全く未知の快感に溺れていく。体内の何もかもが全て吐き出されるかのような、男でもそうは体験できない壮絶な射精を彼女は味わっていた。それはある意味で不幸なことだろう。一度これほどのオーガズムを味わってしまえば、並大抵のものでは最早満足できまい。

爪先から頭頂まで全身を硬直・痙攣させる今の彼女は、奇妙な前衛芸術のようにも見える――いや、そのような言葉は不適切だ。今の彼女の淫らさ・美しさは、そんな陳腐な表現でカバーできる範囲を軽く超えている。紫の身体は、女の美しさの極地にあるかのような完璧なものだったが、そこに汚らわしい男のペニスが加わることで、さらに一段階上の魅力、魔性すら備えるようになっていた。

激しく脈打つモノに吸い付いた触手は、吐き出される汚濁、紫の欲望を、ぐぶり、ごぽりと音を立てて吸い上げていく。さながらポンプのようだ。吸い上げるその圧によって彼女はまた性感を覚え、更に激しく吐精する。まさに快楽の永久機関である。終わりはなかなか訪れなかった。

「はーッ、あひっ、イイ、おちんちん、さいこぉぉ……っ」

二十秒ほども続いたろうか、肉欲の奔流はようやく終わりを迎え、白痴じみた呟き

を漏らしながら、彼女は床へ崩れ落ちる。体内にあったものが全て出て行ったような、ある種の虚脱感、開放感があった。やがて快楽の余韻が終わると、全身を打ちのめすような疲労が襲いかかる。当然のことだ。許容量など完全に無視した刺激を休む暇もなく与え続けられて、そうならないほうが不自然というものだ。

周囲では触手が蠢いている。未だ紫の肉体に執着しているようだった。それでも、彼女には最早意識を保ち続ける余裕すらなく――ないというか、奪われたのだが――瞳を閉じ、思考を闇の底へ沈めていく。寝ている間にどんな淫らことをされるだろうという、邪な空想をふくらませながら。